

# 平家物語卷第七のテキストと〈曲節〉

鈴

木

孝<sup>たか</sup>

庸<sup>つね</sup>

はじめに

平曲譜本は、おもに晴眼者の平曲習得または平曲演奏用に作られたと考えられている。晴眼者が平曲に積極的に関わるのは、江戸時代からである。演誦の伝統は、室町時代の一方流<sup>いちかた</sup>が、江戸時代に前田流と波多野(秦野)流に分かれた。両流に譜本が作成され、前田流の代表的なものは、『平家吟譜』、豊川本、『平家正節』、波多野流譜本は『平家物語』あるいは『声節平家物語』という題で譜本が残されている。

諸譜本のうち、成立年時が明確なものは、『平家吟譜』(一七二七―一七三七)と『平家正節』(一七七六)である。また、わずか五句(五章段)だけであるが、貞享四年(一六八七)書写の譜本(外題なし)が、年記の明らかな譜本として、現在知られている最古である。

このほかに、成立年代が確定しないが、古い段階の譜本として注目されるのは、

・筑波大学蔵『平家物語』(P140-12) : : 巻第一に譜記あり。

・昭和女子大学蔵『平家物語 前田流』

・東北大学附属図書館蔵(旧制二高旧蔵)『平家物語かたり本』

・ 山口県立図書館蔵『秦音曲鈔』しんおんきょくしょう

である。

これらの譜本は、墨譜はかせの形しやう（象）に様々な工夫がある。古い段階の譜記は、声明の譜記と同様に線によるもので、方向、曲がり具合などによって音の扱い方を指示している。時代が下ると文字表記で音の動かし方を一括指示する譜記も現れた。しかし、その譜記は、実際にどのようなように発声すべきか、分らないものが多い。現在、演誦が可能なのは、最後出の譜本『平家正節』の譜記である。『平家正節』の譜記は、線条式と文字式の融合体である。古い譜記を推測するには、『平家正節』の譜記を確実に理解する必要がある。これにより、古い時代の〈語り・演誦〉はどのようなものだったのか、〈平家語り〉の基本とはどのようなものかを、後代の資料からさかのぼるようにして考えることができるだろう。

ところで、平曲譜本は、実際の声に関わる重要な情報を持っているのだが、もうひとつ、どのような「平家物語のことば」を語ったのかという情報も持っている。従来、平家物語のテキスト研究と言えば、譜本を含めて検討されることは少なかったと思う。江戸時代のもの、新しい資料という認識が強かったためか、版本と大差なしと考えられたためか、それとも余計な符号（墨譜）がついていたためだろうか。しかし、譜本には、まだまだ説明されるべき宝物が隠されていると思う。

本稿は、右のような問題意識のもとに、特に、「平曲譜本の物語のテキストは、どのような特徴をもっているのか」あるいは「どのようなテキストに基づいて作られているのか」を検討し、さらに「譜本間の節付けの異同はどのようなになっているのか」に関する検討結果を報告する。

譜本のテキストに関するこれまでの研究は、渥美かをる（「平曲譜本の研究」一九五二、三：「日本文学研究」特別號「平曲の総合研究」所収論文：など）山下宏明『平家物語の生成』（一九八四。明治書院）の成果があり、

・『平家正節』は、下村時房刊本に近いテキスト。

・波多野流譜本『平家物語』は、流布版本に近いテキストと指摘されている。

また、奥村三雄は、譜本を含んだ所謂「語りもの系・一方系」平家物語のテキストの近さ遠さに関する検討を行い（『波多野流平曲譜本の研究 付影印本』一九八六、勉誠社）、結果を「一方流諸本相互における詞章差例数」として出している。奥村の検討した譜本は、『平家正節』、横井也有『平語』、早稲田大学演劇博物館蔵・豊川本、波多野流譜本の四本であり、（前田流関係には他本も加えているとのこと）、これに覚一本、葉子十行本、下村時房刊本、流布本の一方系テキストを加えている。この表をみると、

・譜本全体は、覚一本、葉子十行本よりも、流布本に近い。

・前田流譜本よりは、波多野流譜本の方が、「一方系テキスト」に近い。

・前田流譜本は、流布本よりは、下村時房刊本に近い。

と言えるようである。

なお、奥村の検討した句は、三十五句（殿上闇討、鱸、禿、我身栄花、妓王、二代后、額打論、清水炎上、殿下乗合、願立、教訓状、徳大寺厳島詣、康頼祝、卒都婆流、蘇武、足摺、有王、僧都死去、辻風、燈籠沙汰、大臣流罪、厳島還御、信連、高倉宮園城寺入御、競、三井寺炎上、都帰、火打合戦、忠度都落、青山沙汰、宇佐行幸、浜軍、落足、小宰相、女院出家）とのこと。巻第一所収の十句を中心とする平物句のほか、読物、炎上物、灌頂巻を含めた由である。

このたび私は、平家物語の巻第七に限定して、諸譜本のテキストがどのような形、関係になっているのかの

比較検討を行った。

取り上げた譜本は、①尾崎家本『平家正節』を基本とし、これに、

- ② 山口県立図書館蔵『秦音曲鈔』……勉誠社刊影印による。
- ③ 波多野流譜本『平家物語』（京大蔵本）……勉誠社刊影印による。
- ④ 昭和女子大学蔵『平家物語 前田流』……紙焼写真による。
- ⑤ 東北大学蔵『平家物語かたり本』……電子複写による。
- ⑥ 黒部市、宮崎文庫記念館蔵『平家物語』（平家吟譜）……紙焼写真による。

の五譜本を対校した。また、⑦貞享四年書写譜本は、所収の五句のうち、四句が物語の巻第七に含まれるので、それはそれぞれの句の対校資料に加えた。

『平家正節』の組織は独特で、平家の物語の順に配列されていないのだが、私はここ数年、琵琶の師・橋本敏江の通し演奏会を機会とし、所蔵者・尾崎正忠先生の許可を得て、物語順の翻刻写譜を行っている（二〇〇六年末に巻第九の分まで終了）。巻第八までの分は、私の科研費報告書「平曲伝承資料の基礎的研究」（二〇〇六、三 課題番号1510480）にまとめてある。巻第七の諸譜本対校にあたっては、この報告書をもとにした。

全巻分の対校は、現在のとこ難しいので、一卷分をと考えたのであるが、巻第七を選んだ理由は、物語中の大きな山場というべき「木曾義仲の戦い」と「平家の都落ち」を記す巻であることと、〈語り〉の三つの大きな傾向の「節物」「拾物」「読物」が一卷のうちにすべて含まれていることからである。奥村三雄は、全巻の諸傾向を過不足なく拾い上げて対校したが、私は、物語の連続性を尊重しながら、一卷分にしてみたのである。

一 平家物語卷第七のテキスト対校結果（その一）

検討は、次のように分けて行つた。

第一段階

― 違いを三種類に分けて、数値で譜本の傾向を判断し、

さらに、揺れと「句」の内容・性格・文章との関連を考える。

第二段階

― 大きな差違と曲節との関係。

さらに、大きな差違の対校による譜本のグループ分け。

テキストの異同と〈曲節〉との関係を、結論的に概括するならば、本文のこまかな字句から比較的大きなもので差違の多く認められるのは、〈口説〉や〈白声〉で語る部分のテキストある。反対に、〈三重〉〈中音〉等のテキストは、一定（固定）していることが分かる。〈語り〉の流派の違いは、テキストの違いとして考えられることが多いが、いわゆる聴かせどころに関しては、流派に差違はない。また〈三重〉〈中音〉のテキストは、違いがあっても、音数律としてみた時に変わりが無い程度のものである。

右のような実態を、「聖主臨幸」で説明しておこう。この句は、平家一門が都落ちの際に、邸宅に火をかけて出たことをうけて、それらの邸宅が、過去に天皇・后妃がお出ましになった栄光の場所であることを対句仕立てて回想し、そのような栄花の地が片時の間に焼失したことを傷む。そして、平家一門の運命の急激な暗転を、「昨日」と「今日」、「保元の昔」と「寿永の今」との対比で慨嘆する。前半は、これらのテキストを〈中音〉〈初重中音〉〈三重〉という詠嘆的な曲節を用い重ねて表現する。後半は、平宗盛・知盛兄弟が、在京していた東国武士を殺して都落ちすべきかどうかという議論、そして、東国武士とのやりとりの場面である。後半は、会話による人間関係の描写で、曲節は語る調子の〈口説〉である。

判断の例

『平家正節』 聖主臨幸（十三之上 尾崎家本影印\* 956頁）

中音 或は 聖主臨幸の地なり

鳳闕空う礎を残し鸞輿唯中ユリ跡を止む

或は后妃遊宴の砌なり

椒房の嵐 聲悲しみ掖庭の露色愁う

〔初重〕粧鏡翠帳の基 弋林釣渚の館 槐棘の座 鴛鸞の栖

多日の経営を空うして片時の灰燼と成果ぬ

況や郎従の屋舎に於ておや

況や雑人の蓬華に於てをや

餘焰の及ふ所在々所々數十町なり

〔三重甲〕強呉忽に亡ひて 上姑蘇臺の露 荆棘に移り

〔甲〕暴秦既に衰て 〔上〕咸陽宮の煙 睥睨を隠しけんも

是には過しとぞ見へし

〔下り〕日來は函谷二の峻しきを固ふせしかとも 北狄の為に是を破られ

今は洪河徑渭の深を憑じか共 東夷の為に是を取れたり

〔初重〕豈圖きや忽に礼儀の郷を攻出されて 泣々無智の界に身を寄んとは

〔初重中音〕昨日は雲の上にて雨を降す 神龍たりき

今日は廊の邊に水を失ふ 枯魚のことし

〔初重〕禍福道を同うし 盛衰掌を反す

今日の前有り 〔初重中音〕誰か是を悲まさらん

保元の昔は春の花と栄しかとも 壽永の今は秋の紅葉と落果ぬ

〔口説〕畠山の庄司重能 小山田の別當有重 宇都の宮の左衛門朝綱

<p>〔秦音曲鈔〕 (影印 412頁)</p>	<p>(1) : 12</p>	<p>(2) : 13</p>	<p>(3) : ②</p>
<p>風の声</p>	<p>郎従の蓬華 雑人の屋舎</p>	<p>愁さらん</p>	<p>今は又</p>
<p>と</p>	<p></p>	<p></p>	<p></p>

是等は 大番役にて折節在京したりけるか  
其時既に  
誅せらる

へかりしを

新中納言知盛の脚の異見に申されけるは

彼等百人千人か首を斬らせたまひたりとも御運たに

尽させたまは、

御世を保せたまはん事も

有難し

故郷に候妻子どもの

さこそは歎き悲み

候らはんつらめ

唯理を曲て下させたまへ

若不思議に運命開けて都へ帰り上らせたまふ事も候は、有難御情にてこ

そ候はんつらめと

申されたりければ大臣殿

さらは 疾下れとこそ

宣ひけれ是等頭を低れ

血の涙を

流ひていつくまでも御供仕候はんと

申ければ 大臣殿

汝等か魂は 東国にこそ有へけれ

脱鼓はかり西国へ召具すへきやうなし唯疾下れとこそ

半下ケ宣ひけれ

初重 是等も二十餘年の主なりければ別れの涙押へ難し。

しか

(ナシ)

斬る

へきに  
定りて

(ナシ)  
たまひなは

(ナシ)  
有へからず

所従等

(ナシ)

んすらん

たまふへう  
もや候らん  
(ナシ)

(ナシ)

傾け

(ナシ)

はらくと

皆

ける  
とそ

前半のテキストは、形の定まった文章、後半のテキストは、自由な形のことばである。この句について、『平家正節』と『秦音曲鈔』の異同をみると、前半はほとんど違いがない。あっても、

『平家正節』…誰か是を悲<sup>ま</sup>さらん

『秦音曲鈔』…誰か是を愁<sup>ら</sup>らん

という程度である。ところが、後半は、

『平家正節』…唯理を曲て下させたまへ若不思議に運命開けて都へ帰り上らせたまふ事も候は、有難御情にてこそ候はんづらめ

『秦音曲鈔』…唯理を曲て下させたまふへうもや候らん (こちらは『正節』のテキストの 部相当がな

い)

と違いが大きくなる。

右のように対校した結果を、違いの大きさによって三つに分け、後の結果の数字を、フォントを変えて表示した。

- (1) 助詞、活用語尾の類 …数字は、Times New Roman
- (2) 単語、一文節程度 …数字は、ゴシック
- (3) 二文節以上、文単位、 …数字は、○付き (但し0は○なし)

この検討は、奥村の検討よりは、テキストの質的な違いをみたことになると思う。

●平家物語卷第七のテキストと〈曲節〉

實盛最期	篠原合戦	俱利迦羅落	木曾願書	燧合戦	竹生島詣	北国下向	
⑩ 34 36	⑩ 40 21	⑬ 27 18	③ 23 31	① 30 12	② 11 8	③ 24 6	秦音曲鈔
⑭ 24 45	⑬ 33 14	② 15 26	⑦ 19 17	⑤ 19 10	④ 5 5	④ 13 5	波多野流
③ 8 22	④ 14 18	④ 10 15	③ 9 11	③ 4 6	0 4 1	① 17 3	昭和女大
0 0 4	0 0 2	① 0 2	0 0 3	① 1 2	0 0 0	0 1 1	東北大
0 0 3	0 1 5	② 0 2	② 1 3	1 0 1	0 0 1	0 3 1	吟譜
				① 0 7			貞享本

対校結果

『平家正節』を基本として見た平曲譜本の諸本のテキスト比較・概観表 — 平家物語卷第七相当分

經正都落	忠度都落	聖主臨幸	惟盛都落	主上都落	平家連署願書	山門返牒	木曾山門牒状	玄舫／遷亡
9 ③ 19 20	② 13 12	⑤ 20 22	⑩ 43 31	② 15 12	⑤ 14 7	0 14 9	⑥ 32 12	
6 ③ 23 16	⑥ 7 9	⑥ 26 20	⑧ 37 16	0 8 8	② 10 3	0 7 3	③ 14 11	
5 0 0 9	① 6 9	① 11 15	④ 27 17	0 8 4	0 3 2	③ 11 6	④ 10 11	
1 0 0 1	0 4 2	(このシ)	0 3 3	0 1 1	0 0 1	0 0 0	0 0 1	
1 0 0 2	0 3 1	0 0 5	0 3 2	0 0 0	0 0 1	0 0 1	0 1 1	
0 1 3								

右の対照結果について気付いたことを記すと。

1 『平家正節』、東北大『平家物語かたり本』、『平家吟譜』がテキストとして近い関係で（貞享本も）あること。

『秦音曲鈔』、波多野流『平家物語』、昭和女子大『平家物語前田流』が、ひとまとまりであるかどうかは定かでないが、『平家正節』からはそれぞれに遠い関係にあることが分かる。

2 差違の多いもの（テキストの揺れの幅が大きいもの）のうち、

- ・ 三項目ともに違いの多い句は、「俱利迦羅落」「篠原合戦」「実盛最期」「主上都落」「一門都落」である。
- ・ (1)(2)項目（あるいは(2)項目）に違いの多い句は、「北国下向」「燧合戦」「木曾願書」「玄舫」「維盛都落」「聖主臨幸」「忠度都落」である。

3 差違のさほど生じていない句は、

	福原落			一門都落			青山				
	①	6	5	⑩	51	39	①	6	2	②	8
④	11	7		⑩	56	29	①	6	5	②	11
0	1	5		③	22	15	①	2	7	①	6
0	1	0		0	0	4	0	0	0	0	0
0	0	0		0	0	3	0	2	0	0	0
0	0	3					③	1	4		

「竹生島詣」「木會山門牒状」「山門返牒」「平家連署願書」「聖主臨幸」「經正都落」「青山」「福原落」をあげることができる。これらは「読物の句（駢儷文的文章）」と「琵琶に関係する句（經正關係）」と「詠嘆的美文（駢儷文的文章）」と括ることができる。「文飾」への配慮の濃いものと、「琵琶」関係と言い替えてもよい。

二 平家物語巻第七のテキスト対校結果（その二）

前節の結果をうけて、次に、(3)の項目に数えた比較の大きな差違を取り出して、譜本間の異同を紹介する。あわせて、その箇所について、流布本（架蔵明暦二年刊）と下村時房本（日本古典全集）のテキストを付した。〈口説〉のテキストはゴシック体に、〈白声・素声〉のテキストは行書体にした。

具体例を八例挙げ、あとは、概括の表にする。

例(1)(2) 「北国下向」の、人名に関する異同

『平家正節』

拾	大将軍には……侍大将には	越中の前司盛俊	秦音	波多	昭和	東北	吟譜	流布本	下村本
	上総の大夫の判官忠綱	飛弾の大夫の判官景高	河内の判官秀国	高橋の判官長綱	武蔵の三郎左衛門有国	越中の次郎兵衛盛綱	○	○	○
	中	の次郎兵衛盛續	×	○	○	○	○	×	×
			越中の次郎兵衛盛つぎ	○	○	○	○	○	○

例(3) 「篠原合戦」の、軍勢の動きに関する異同

『平家正節』		秦音
<p>素声 去程に平家は加賀の国篠原に引退いて人馬の息休、たまふ所に木曾殿一万餘騎篠原に押寄て聞と咄とぞ作りたまふ木曾殿の方より今井の四郎兼平五百餘騎にて馳向ふ平家の方より畠山の庄司重能小山田の別當有重宇都の宮の左衛門朝綱是等は一番役に折節在京したりけるか是等は故ひ者なれば軍のやうとも扱よとて今度北国へ向られたり彼等兄弟三百餘騎楯の面にぞハツミ追んたる</p> <p>■口説始は</p> <p>畠山今井五騎十騎つゝ出し合せて勝負をせさせけるか</p> <p>後には</p> <p>コハリ下ケ 両方たかひに乱れ合てぞ戦ひける</p>	<p>Aは■の位置に</p> <p>Aは■の位置に</p> <p>AはA</p> <p>AはA</p> <p>AはA</p> <p>AはA</p> <p>AはA</p> <p>Aは■の位置に</p>	<p>秦音</p> <p>波多</p> <p>昭和</p> <p>東北</p> <p>吟譜</p> <p>流布本</p> <p>下村本</p>

例(4)(5) 「主上都落」の、平宗盛のことばに関する異同

『平家正節』		秦音
<p>口説 同じき廿四日の小夜更方に前の内大臣宗盛公建礼門院の渡らせ給ふ六波羅池殿に参ッて申されける</p> <p>▼此世の中の形勢さりとともこそ存しか今は斯にこそ候ふめれ人々は唯都の内にていかにもならんと</p>	<p>▼木曾既</p> <p>▼×</p> <p>▼×</p> <p>▼×</p> <p>▼×</p> <p>▼○</p> <p>▼×</p>	<p>秦音</p> <p>波多</p> <p>昭和</p> <p>東北</p> <p>吟譜</p> <p>流布本</p> <p>下村本</p>

申合<sup>レ</sup>けれどもまのあたり女院二位殿にうきめを見  
せまゐらせんも我身ながら口惜う候えは

例(6) 「聖主臨幸」の、平知盛のことばに関する異同

『平家正節』	秦音	B   ×
□説……新中納言知盛の卿の異見に申されけるは	波多	B   ○
……故郷に候妻子とものさこそは歎き悲み候らはんつ	昭和	B   ○
	東北	B   ○
	吟譜	B   ○
	流布本	B   ×
	下村本	B   ○

らめ唯理を曲て下させたまへ若不思議に運命開けて  
 都へ帰り上らせたまふ事も候はゞ有難御情にてこそ候  
 はんづらめと申されたりければ

例(7)(8) 「一門都落」の、平宗盛のことばに関する異同

『平家正節』		秦音	波多	昭和	東北	吟譜	流布本	下村本					
<p>【口説】肥後の守貞能は……と申ければ大臣殿                      貞能はいましらぬか木曾既に北国より五万余騎に                      て攻上り天台山東坂本にみちくたんなり▼法皇                      も過し夜半に失させたまひぬ▲せめては行幸はか                      りをもなしまいらせて一先もおもふそかしと                      宣へは</p>	<p>▼郎等に                      楯の六郎                      親忠手書                      に大夫坊                      にもなら                      覚明六千                      んと申合                      余騎天台                      れけれど                      山へ競上                      もまのあ                      り三千の                      たり女院                      衆徒引具                      二位殿に                      して只今                      うき目を                      見せ参ら                      都へ乱れ                      入由聞え                      せんも我                      身ながら                      口をしけ                      れば</p>	<p>▲人々は                      只都の中                      にていか                      にもなら                      んと申合                      れけれど                      もまのあ                      たり女院                      二位殿に                      うき目を                      見せ参ら                      せんも我                      身ながら                      口をしけ                      れば</p>	<p>▼   ×</p>	<p>▼   ×</p>	<p>▼   ×</p>	<p>▲   ○</p>	<p>▼   ×</p>	<p>×</p>	<p>×</p>	<p>○</p>	<p>○</p>	<p>○</p>	<p>○</p>



- 1 〈口説〉〈白声〉のテキストの差違が大きいがわかる。
- 2 〈拾〉〈指声〉〈下ケ〉も「歌」というより「ことば」である。
- 3 譜本のテキストは、下村時房刊本や流布本を直接下敷きにしたものではない。
- 4 『秦音曲鈔』のテキストの独自性が目立つ。
- 5 『秦音曲鈔』と波多野流譜本とで、一グループになることもある。
- 6 東北大本と『平家吟譜』と『平家正節』は一グループとみることができる。
- 7 昭和女子大本は、中間的というべきか。
- 8 流布本と下村本とで異なる時には、流布本の形が波多野流譜本と同じである例がいくつかある。
- 9 流布本と下村本とで異なる時には、下村本の形が『平家正節』と同じである例がいくつかある。

右の結果について気の付くことを記すと。

29	口説	●	c	b	●	●	●	●	b	●
28	拾	a	d	c	a	a	a	a	b	b
27	下ケ	●	b	b	●	●	●	●	●	●
26	口説	●	b	b	●	●	●	a	b	●
25	口説	a	●	●	a	a	a	a	a	a
24	素声 … 因理…									
23	口説	a	●	a	a	a	a	●	●	a
22	口説	●	b	●	●	●	●	b	●	●

三 平家物語卷第七の節付けの異同について

次に、平家物語卷第七に限って、諸譜本の〈曲節〉の配分の異同がどのようになっているのかを検討した。具体例を、ここでも「聖主臨幸」を用いることとした。

『平家正節』 聖主臨幸

〔中音〕或は 聖主臨幸の地なり

風闕空う礎を残し 鸞輿唯〔中〕ユリ 跡を止む

或は 后妃遊宴の砌なり

椒房の嵐 聲悲しみ 掖庭の露 色愁う

〔初重〕粧鏡翠帳の基 弋林釣渚の館 槐棘の座 鴛鴦の栖

▼多日の経営を空うして 片時の灰燼と成果ぬ

▼況や 郎従の屋舎に於ておや

況や 雑人の蓬華に於てをや

餘焰の及ふ所 在々所々 数十町なり

〔三重甲〕強兵忽に亡ひて 王姑蘇臺の露 荆棘に移り

〔中〕暴秦既に衰て 王威陽宮の煙 睥睨を隠しけんも

是には過しとぞ見へし

〔下り〕日來は 函谷二の峻しきを 固ふせしかとも 北狄の為に是を破られ

今は 洪河徑渭の深を 憑じか共 東夷の為に是を取れたり

〔初重〕豈 圖きや

忽に礼儀の郷を攻出されて ▼泣々無智の界に身を寄んとは

〔初重中音〕昨日は 雲の上にて 雨を降す 神龍たりき

○	○	○	○	○	○	秦音
	○	○	○	○	○	波多
○	○	○	○	○	○	昭和
○	○	○	○	○	○	東北
中音	●	●	○	○	○	吟譜

今日は廓の邊に水を失ふ枯魚のことし

初重 禍福道を同うし盛衰を反す

今日の前に有り 初重中音 誰か是を悲まさらん

▼保元の昔は春の花と栄しかとも 壽永の今は秋の紅葉と落果ぬ

口説 畠山の庄司重能 小山田の別當有重 宇都の宮の左衛門朝綱 白声 口説白声

是等は 大番役にて折節在京したりけるか 其時既に誅せらるへかりしを

新中納言知盛の卿の異見に申されけるは

彼等百人千人か首を斬らせたまひたりとも 御運たに尽させたまは、

御世を保せたまはん事も有難し

故郷に候妻子どものさこそは 歎き悲み候らはんつらめ

唯理を曲て下させたまへ

若不思議に運命開けて 都へ帰り上らせたまふ事も候は、

有難御情にてこそ候はんづらめと

申されたりければ 大臣殿

さらは 疾下れとこそ

宣ひけれ ▼是等 頭を低れ 血の涙を流ひて

いつくまでも 御供仕候はんと

申ければ 大臣殿

汝等か魂は 東国にこそ有へけれ

脱殻はかり西国へ召具すへきやうなし ▼唯疾下れとこそ

半下ケ 宣ひけれ

初重 是等も二十餘年の主なりければ 別れの涙押へ難し。

※

・各譜本の欄の○は、『正節』と同じ〈曲節〉があることを示す。

・▼は、別の〈曲節〉がその位置に付いていたり、同じ〈曲節〉でも位置がずれる場合を示す。

○	初重下	口説	白声	○	○
○	下ケ		白声	○	○
○	初重下			○	○
○	●			○	○
●	●			○	中音 ●

●は、『正節』と同じ〈曲節〉の指示がないことを示す。

右の表を解説すると。

1 『正節』が、

**〔初重〕**粧鏡翠帳の基 弋林釣渚の館 槐棘の座 鴛鴦の栖

多日の経営を空うして片時の灰燼と成果ぬ

況や 郎従の屋舎に於ておや

況や 雑人の蓬葦に於てをや

餘焰の及ふ所在々所々数十町なり

という節付けであるところを、

『秦音曲鈔』は、**〔初重〕**粧鏡翠帳の基 弋林釣渚の館 槐棘の座 鴛鴦の栖

**〔初重中音〕**多日の経営を空うして片時の灰燼と成果ぬ

**〔初重〕**況や 郎従の蓬葦に於てをや

況や 雑人の屋舎に於てをや

餘焰の及ふ所在々所々数十町なり

という節付けにしている。

2 後半部分の節付けの違いは上下段で対照させて示すことにする。

『平家正節』

□説 畠山の庄司重能 小山田の別當有重 宇都の宮の左衛門朝綱是等は 大番役にて折節在京したりけるか 其時既に誅せらるへかりしを 新中納言知盛の卿の異見に申されけるは

彼等百人千人か首を斬らせたまひたりとも 御運たに尽さ

せたまは 御世を保せたまはん事も有難し

故郷に候妻子どものさこそは 歎き悲み候らはんつらめ

唯理を曲て下させたまへ

若不思議に 運命開けて 都へ帰り上らせたまふ事も候は

有難御情にてこそ候はんづらめと

申されたりければ 大臣殿

さらは 疾下れとこそ

宣ひければ 是等頭を低れ 血の涙を流ひて

いつくまでも 御供仕候はんと

申ければ 大臣殿

汝等か魂は 東国にこそ有へけれ

脱殻はかり 西国へ召具すへきやうなし 唯疾下れとこそ

半下ケ 宣ひけれ

『秦音曲鈔』

□音 畠山の庄司重能 小山田の別當有重 宇都の宮の左衛門朝綱是等は 大番役にて折節在京したりしか 既に斬るへきに定りしを 新中納言知盛の卿の異見に申されけるは

彼等百人千人か首を斬らせたまひたりとも 御運尽さ

せたまひなは 御世を保せたまはん事も有へからず

故郷に候 妻子所從等さこそは 歎き候らはんつらん

唯理を曲て下させたまへうもや候らんと

申されければ 大臣殿

さらは 疾下れとこそ

宣ひけれ □説 是等首を傾け 血の涙を はらくと流ひて

いつくまでも 御供仕候はんと

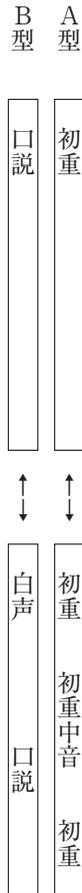
申ければ 大臣殿

汝等か魂は 皆東国にこそ有へきに

脱殻はかり 西国へ召具すへきやうなし 唯疾下れとこそ

初重下 宣ひける

今回の検討で顕著であったのは、左の二つの違いである。



A型は、〈ウタ〉的な〈曲節〉の異同であり、B型は、〈カタリ〉的な〈曲節〉の異同である。

次に、『平家正節』の〈曲節〉構成に対して、他の譜本の近さ遠さに関する対校結果を表示する。

「正節」の〈曲節〉に対する異なり数

	(正節)の数											
(曲節)の数												
北国下向	11											秦音
竹生島詣	16											波多
燧合戦	18											昭和
〔木曾願書〕	15											東北
俱利迦羅落	13											吟譜
篠原合戦	20											
實盛最期	23											
還亡	16											
〔木曾山門謀状〕	2											
〔山門返牒〕	5											
〔平家連著願書〕	7											

主上都落	25	12	7	10	10	10
惟盛都落	26	10	5	4		8
聖主臨幸	11	5	2	1	1	7
忠度都落	19	4	4	3	4	8
経正都落	25	4	5	6	4	16
青山	13	7	1	1	0	7
一門都落	28	11	10	10	11	9
福原落	16	6	4	5	4	8

※ 相対的に数の多いもの（『正節』から遠い）を○で囲んだ。

・ 数の少ない箇所を網掛けにした。

・ 数が同じでも、同じ箇所異なるわけではない。

・ 「読物」部分の〈曲節〉の異同については、今回取り上げないことにした。

・ 波多野流譜本の「木會願書」の「問あひの物」部分は、テキストはあるが節付けはない。

・ 東北大学本に、「惟盛都落」はない。

右の表について気付いたことを記す。

1、「竹生島詣」は、譜本（流派、時代）を越えて、固定されていることがわかる。

これにやや近いのは「燧合戦」「聖主臨幸」「青山」か。

……「竹生島詣」と「青山」ならば、琵琶に関わる話であることと関連するか。

2、右と対照的に、〈曲節〉の動きが、譜本によっていろいろなのは、「還亡」「主上都落」。

これに次ぐのが、「篠原合戦」「一門都落」。……いろいろな話材を組合せて一句としているためである。

う。

- 3、譜本単位で見ると、『正節』から遠いのは、『秦音曲鈔』『平家吟譜』。
- 4、相対的に近いのは、昭和女子大本、波多野流譜本。
- 5、『秦音曲鈔』と『正節』は、テキストも遠い関係にあったが、節付けも遠い関係にある。
- 6、『平家吟譜』と『正節』は、テキストは近い関係だが、節付けは遠い。
- 7、昭和女子大本・波多野流譜本と『正節』は、テキストは遠い関係だが、曲節付けは近い。
- 8、テキストの近さと、節付けの近さは、必ずしも連動しない。

\* \* \* \* \*

以上、本稿は、平家物語巻第七の一巻分のテキストと平曲の節付けのあり方を、主な譜本の比較によって考えようとしたもので、基礎的な作業結果の報告のうち、テキスト分については一応終了、節付けについては、第一段階分までとした。

本稿のおわりに記したように、テキストの異同と節付けの異同とが同じ原理で動いていないように見えるのは、まことに興味深く考えられる。節付け異同の第二段階の作業も終了しているので、いずれ続稿を期したいと思う。

付記 本稿のもとになった検討のうち、テキストに関する部分は、「汎諸本論研究会」(代表・松尾葦江氏。平成十八年九月十六日、於國學院大學)において報告し、改訂したものを本学部「声」とテキスト論」研究会(平成十八年十二月八日)において報告し、曲節に関する部分を本学大学院現代社会文化研究科「叙事文藝における修辞の研究」研究発表会(平成十九年二月二日)において報告した。当日御教授御意見を下された方々に御礼申し上げる。